



Title	韓国語の話言葉における前置き表現の研究
Author(s)	金, 倫嬉
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/52090
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (金 倫 嬉)

論文題名

韓国語の話言葉における前置き表現の研究

論文内容の要旨

本論文は、韓国語の話言葉における前置き表現の使用実態を調べることを目的とした。韓国人の談話の中で、どういうときに、どういう前置き表現が使われ、コミュニケーションをスムーズにさせているかを明らかにする。具体的には、①発話の状況や場面によって現れる前置き表現に違いはあるのか、②同じ表現が異なる場面で現れるときにどのように使用されるか、③一人話と対話の場合、それぞれどんな前置き表現を用い、話を組み立てているか、また、待遇的なものが多くみられているかを調べる。そのために、異なる3つの談話(発表、対話、討論)を選び、それぞれの前置き表現の特徴を究明する。

分析対象は、発表談話の場合、31名の口頭発表の発話を分析対象にする。対話談話は、映画やドラマのシナリオ7篇を対象にする。そして、討論談話は、討論場面の発話6回分、26名を対象にする。

分析の結果、1) 発表談話における前置き表現についてである。まず、状況・場面による結果である。釈明表明は、話題の逸れ、説明の繰り返しによる不満を予測するとき、また、用語及び、表現の不確実さ、発表の進み方の問題、参考資料の不十分さなどに現れた。共感表明は知識を共有するとき、心配表示は用語の難解・話題の難解を表す前にそれぞれ現れた。謙遜表明は、発表者の考えを述べる前に現れた。発表者の自分の言語行動を予告するときは行為表明が用いられた。話題提示・切り出しは、主題の提示、話題転換および話題の切り出しに現れた。先行内容喚起は前後内容の関連性を表わして説明をする時に、情報提供は情報の出所(経験、媒体、伝聞、引用など)を言及するとき前置き表現として現れた。さらに、補足説明表示は説明を具体化するとき現れた。そして、発表談話の全般的な特徴としていえるのは、伝達性を高めるための前置き表現が友好的対人関係を保つための前置き表現より優先されることである。なお、「話題提示・切り出し」と「先行内容喚起」が多用された。その理由は、前置き表現が話し手の全体発話と関連づけながら話を進めているからと考えられる。前置き表現は発話を構造化するとともに、発話内容を弱化、強化する機能があると裏付けられた。

2) 対話談話における前置き表現についてである。まず、状況・場面による結果である。謝罪表明は、依頼、断る前に現れた。共感表明と心配表示は忠告するとき、共感表明と釈明表明は助言・提案をするときに現れた。釈明表明は謝るときに、謙遜表明は肯定的な評価を受けたときに現れた。行為表明は質問・頼みをするときに現れる。説明を深めるときは、情報提供、話題提示・切り出し、補足説明表示、先行内容喚起の前置き表現が現れている。そして、対話談話の全般的な特徴としていえるのは、友好的対人関係を保つための前置き表現が伝達性を高める機能より優先されることである。なお、「釈明表明」と「共感表明」が多用された。これは話し手の自己中心的な態度がうかがえる。

3) 討論談話における前置き表現についてである。まず、状況・場面による結果である。謝罪表明は、発言を聞き逃したとき、進行の流れに支障が生じるときに現れる。共感表明と先行内容喚起は反論を述べるときに現れる。釈明表明は資料準備の不足、根拠の不足を述べる前に現れる。行為表明は、発話権の要求、意見を述べるときに現れる。話題提示・切り出しは、発話権を保持するとき、反論を述べる前に現れる。情報提供は、発表者の意見に妥当性と信憑性を高めるときに現れる。そして、討論談話の全般的な特徴としていえるのは、伝達性を高める前置き表現が友好的対人関係を保つための前置き表現より優先されることである。なお、「行為表明」と「先行内容喚起」が多用された。これは主題から逸脱しないようにするためであると考えられる。さらに、「行為表明」と「先行内容喚起」は話者交替を組織化する機能ももつ。

以上をまとめると、同じ前置き表現でも談話のジャンルによってその表現の意味合いが異なることと、談話別に多用する前置き表現がある一方、多用されない前置き表現もある。そして公的場面であれば、固定化した表現が使われる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 （ 金 倫 嬉 ）			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	岸田 文隆
	副 査	教授	真嶋 潤子
	副 査	准教授	小西 敏夫
	副 査	教授	塩谷 茂樹
	副 査	准教授	植田 晃次

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語の談話において、どのようなときに、どのような前置き表現が使われ、コミュニケーションにおいてそれがいかなる機能を担っているのかを明らかにすることを目的としている。前置き表現についての調査・研究は、英語や日本語など他の言語においては相当の蓄積があるが、韓国語については未開拓の状況であり、本論文は先駆的意義を持つものと考えられる。

本論文は、韓国語の発表談話（口頭発表13篇、のべ31名の談話）、対話談話（映画およびドラマのシナリオ7篇）、討論談話（テレビの討論6篇、のべ32名の談話）を対象として、前置き表現の実態調査を実施し、その分布・出現頻度・機能につき、量的・質的分析を行っている。

まず、韓国語談話を対象とした前置き表現の調査・分析を始めるに当たって、前置き表現についてのおもに日本語を対象とした先行研究を検討したあと、韓国語の実情を考慮しつつ、分析対象資料の選定、前置き表現の定義と基準の設定、前置き表現の機能の分類をおこない、友好な対人関係を保つ機能として「謝罪表明、謙虚表明、釈明表明、共感表明、心配表示」、また、伝達性を高める機能として「行為表明、話題提示・切り出し、先行内容喚起、情報提供、補足説明表示」の10類型を提示した。つぎに、韓国語の発表、対話、討論談話における前置き表現の使用実態について調査・分析し、前置き表現の10類型の機能が、それぞれの談話においてどのような状況・場面で、また、どのような頻度であられるかを調べた。その結果、発表談話においては、「話題提示・切り出し」28.5%や「先行内容喚起」22.4%など、伝達性を高める機能をもつ前置き表現が多用されること、対話談話においては、逆に、「謝罪表明」20.7%や「共感表明」19.5%など、友好な対人関係を保つ機能をもつ前置き表現が多用されること、また、討論談話においては、「行為表明」26.0%や「先行内容喚起」24.6%など、伝達性を高める機能をもつ前置き表現が8割を超える頻度で多用されることを明らかにしている。

本論文は、韓国語談話の前置き表現につき、初めて実証的な調査・分析をおこなった点で高く評価されるものである。ただし、この方面の研究を今後さらに深化させていくためには、吟味を要する課題も内包している。本論文は、計量的手法によって、韓国語の前置き表現の実相を明らかにしようとするものであるが、前置き表現の定義や基準、機能の類型が必ずしも明示的でない面があり、さらに精緻なものにする必要がある。また、行論の根拠となる用例の提示が不十分なため、説得力を欠く部分があり、必要十分な根拠を示す必要がある。このような若干の課題は有するものの、上に述べたとおり、韓国語談話の前置き表現研究における本論文の先駆的意義は損なわれるものではない。

以上により、本論文が博士(言語文化学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。